室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

# ヌーク市(グリーンランド)におけるデンマーク語に関する覚え書き：記述言語学的研究調査の課題と展望



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 北海道言語研究会<br>公開日: 2014-06-09<br>キーワード (Ja): グリーンランドのデンマーク語,<br>二言語併用社会, 記述調査<br>キーワード (En):<br>作成者: 三村, 竜之<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10258/3315 |

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

# ヌーク市(グリーンランド)におけるデンマーク語に関する覚え書き ： 記述言語学的研究調査の課題と展望

| | |
|---|---|
| その他（別言語等）のタイトル | Notes on the Danish Spoken in Nuuk, Greenland : Issues and an Outlook for descriptive-linguistic research on Nuuk-Danish |
| 著者 | 三村　竜之 |
| 雑誌名 | 北海道言語文化研究 |
| 巻 | 12 |
| ページ | 155-178 |
| 発行年 | 2014-03-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10258/3315 |

北海道言語文化研究
No. 12, 155-178, 2014
北海道言語研究会

# ヌーク市（グリーンランド）における デンマーク語に関する覚え書き*

## –記述言語学的研究調査の課題と展望–

三村 竜之

# Notes on the Danish Spoken in Nuuk, Greenland

## – Issues and an Outlook for descriptive-linguistic research on Nuuk-Danish –

**Tatsuyuki MIMURA**

**要旨**　本稿は筆者が 2013 年 9 月にグリーンランドのヌーク市において実施したデンマーク語に関するフィールドワークの調査報告である。グリーンランド語とデンマーク語の二言語併用社会であるとされるヌークの言語事情を概観するとともに、言語接触や言語変化の視点からヌークにおけるデンマーク語が提起するであろう言語学的な研究課題について概観し、ヌークにおけるデンマーク語が持つ学問的意義や記述言語学的調査の重要性を説く。また、二言語併用社会における記述言語学的調査の難しさや問題点についても考察する。

**キーワード:** グリーンランドのデンマーク語、二言語併用社会、記述調査

### 1.　序

#### 1.1 本稿の目的

本小文は、2013 年 9 月に筆者がデンマーク王国領グリーンランドの Nuuk（以下、「ヌーク」とする）市において実施したフィールドワークの調査報告である。グリーンランド南西部に位置する最大の都市ヌークでは、公用語であるグリーンランド語（より正確には「東エスキモー語東グリーンランド方言」と呼ぶべきか；cf. 宮岡 1978）に加えてデンマーク語も公用語に準ずる機能を果たす、いわゆる二言語併用社会である。

グリーンランドと言えば、北極圏横断や北極点到達を果たした植村直己との繋がりから「極北の地」や「エスキモー」を連想する方も少なくないと思われる。しかし、日本におけるグリーンランドに対する見識は未だもって深いとは言えず、とりわけ言語事情に関しては日本では知られていない事柄がほとんどである。このような背景を鑑みて、筆者はグリーンランドにおける言語事情を明らかにすべく、実地調査を行った。

本稿ではフィールドワークの成果に基づき、まず第一に、日本の学界において未だ認識の浅いヌークの言語事情やヌークにおいて使用されているデンマーク語の諸特徴を概観する。続いて、ヌークにおけるデンマーク語が今後の言語研究に寄与しうるであろう種々の研究課題を概観し、ヌークにおけるデンマーク語を研究調査することの意義と重要性を説く。社会言語学的視点からヌークの言語事情を捉えた研究は少なくない

ものの、そこで使用されるデンマーク語自体に関する研究調査が皆無に等しく、ヌークにおけるデンマーク語を研究することの意義は計り知れないほど大きい。最後に、ヌークでのデンマーク語の調査を具体例として、二言語併用社会における記述言語学的調査が抱える諸問題について考察する。

### 1.2 実地調査の概要

本稿において報告するフィールドワークは、筆者自身が2013年9月11日から21日にかけてグリーンランドのヌークにおいて実施したものである。調査の目的は以下の二つ：

（1）a. ヌークにおいて話されるデンマーク語の構造的側面（特に分節音、アクセント、イントネーション）に関する資料の収集

b. ヌークにおけるグリーンランド語とデンマーク語の使用状況を窺い知ることのできる資料（文字資料、画像、映像等）の収集

（1a）に述べた言語調査に関して若干の補足を行う。調査の形式は、グリーンランド語が母語であるデンマーク語話者[1]をインフォーマントとする対面式（インタビュー形式）の調査であり、また事前に筆者が作成した調査票の項目を読み上げてもらう、いわゆる「調査票読み上げ形式」である。調査票に記した項目の他、必要に応じて、調査項目の確認や関連事項の質問なども追加で行った。

今回の調査対象がアクセントやイントネーションなど韻律的な現象であり、効率よくこれらの韻律的特徴を捉えるためには音節数の多い長めの語が望ましいため、調査項目には複合語を採用した。これまで筆者が行ってきたデンマーク語の調査で用いた調査票を基に、適宜、グリーンランドの文化を鑑みて捕鯨や狩猟に関連する語を構成要素とする複合語も取り入れた。

なお、当初は (1a) の言語調査をフィールドワークの主たる目的としていたが、第5.2節において後述するように、諸般の事情により調査内容の変更や調査自体の中断を余儀なくされたため、結果として、(1b) に記した資料収集の方に比重がおかれることとなった。

## 2. 基礎知識の導入

### 2.1 デンマーク

デンマークは、日本語での正式名を「デンマーク王国」（デンマーク語では Kongeriget Danmark）という。ドイツ連邦共和国の北に位置しバルト海と北海の間に伸びるユトランド半島（Jylland）と、首都コペンハーゲン（København）が所在するシェラン島（Sjælland）や童話作家アンデルセン（Hans Christian Andersen[2]）生誕の地であるオーデンセ（Odense）が所在するフューン島（Fyn）など、大小様々な島々から成る。人口は2013年10月1日時点で5,623,501人（出典: *Danmarks Statistik*; http://www.dst.dk/da）。

一般的にデンマーク王国は「小国」と形容されることが多く、しばしば「九州とほぼ同程度の面積」であるという事実が引き合いに出されるが、これには注意が必要である。というのも、上述の国土を（あまり一般的な呼称ではないかもしれないが）「デンマーク本土」と呼ぶならば、実はデンマーク王国には「本土」以外の国土も存在するためである。「世界最大の島」と呼ばれるグリーンランド（Grønland）と、北大西洋に浮かぶ大小18の島々からなるフェロー諸島（Færøerne）がこれに相当する。アメリカ的な行政区画の枠組みに倣えば、グリーンランドとフェロー諸島はいずれもデンマーク王国の「州」ということになるが、特筆すべきはいずれも自治権を認められているという点であり、それぞれ土着の言語であるグリーンランド語（grønlandsk）とフェロー語（færøsk）に加えデンマーク語が公用語あるいはそれに準ずる機能を有している

写真 1: Nuuk Center（筆者撮影）
1F と 2F がショッピングセンターの Nuuk Center。3F 以上はテナントビル。2005 年より建設計画が進み、2012 年 7 月に営業を開始。
(出典: http://www.nuukcenter.gl/)

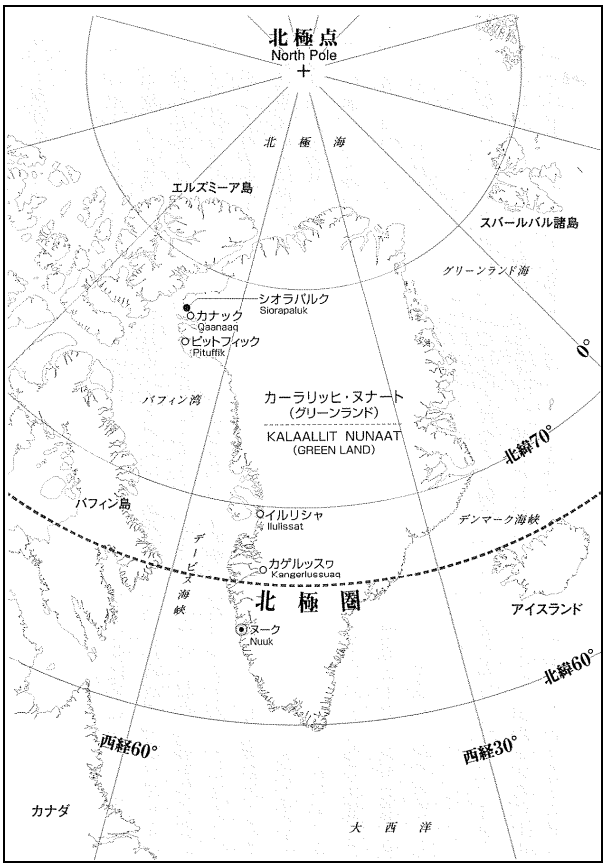


図 1: グリーンランド全図（出典: 日下 (2004: 151); 地名のカナ表記など全て原典のまま）

（グリーンランドにおける言語事情に関しては 第 2.2 節、第 3 節を参照; フェロー諸島における言語事情に関しては Hagström (1984) 等を参照されたい）。

**2.2 グリーンランドとヌーク**

デンマーク語で「緑の土地 [3]」を意味するグリーンランドは、その名前とは裏腹に全体の約３分の４が氷河と雪に覆われた島である。北極海と北大西洋の間に位置し、島のおよそ８割が北極圏に属すためである（なお、土着の言語でありかつ公用語であるグリーンランド語では Kalaallit Nunaat（直訳すれば「（グリーンランドに住む）人の島」の意）と呼ばれる）。

既に述べたようにグリーンランドは「世界最大の島」であり、総面積は約 2,175,600 ㎢であるという（Koch 1975: 9; 出典により微小な差異あり）。その地理的特性故に居住地は南部の沿岸地域に集中しているが、北部にもイヌイットの村落が存在し、捕鯨やアザラシ漁を中心とする伝統的な狩猟生活を営んでいる。人口は 2013 年 7 月 1 日時点で 56483 人（出典: *Kalaallit Nunaanni Naatsorsueqqissaartarfik*; www.stat.gl）。

グリーンランド最大の都市で、「国家」でいえば「首都」に相当する役割を果たす都市が、南西部に位置するヌークである（デンマーク語では Godthåb;「福音」の意）。ヌークの所在する行政区画である Kommuneqarfik

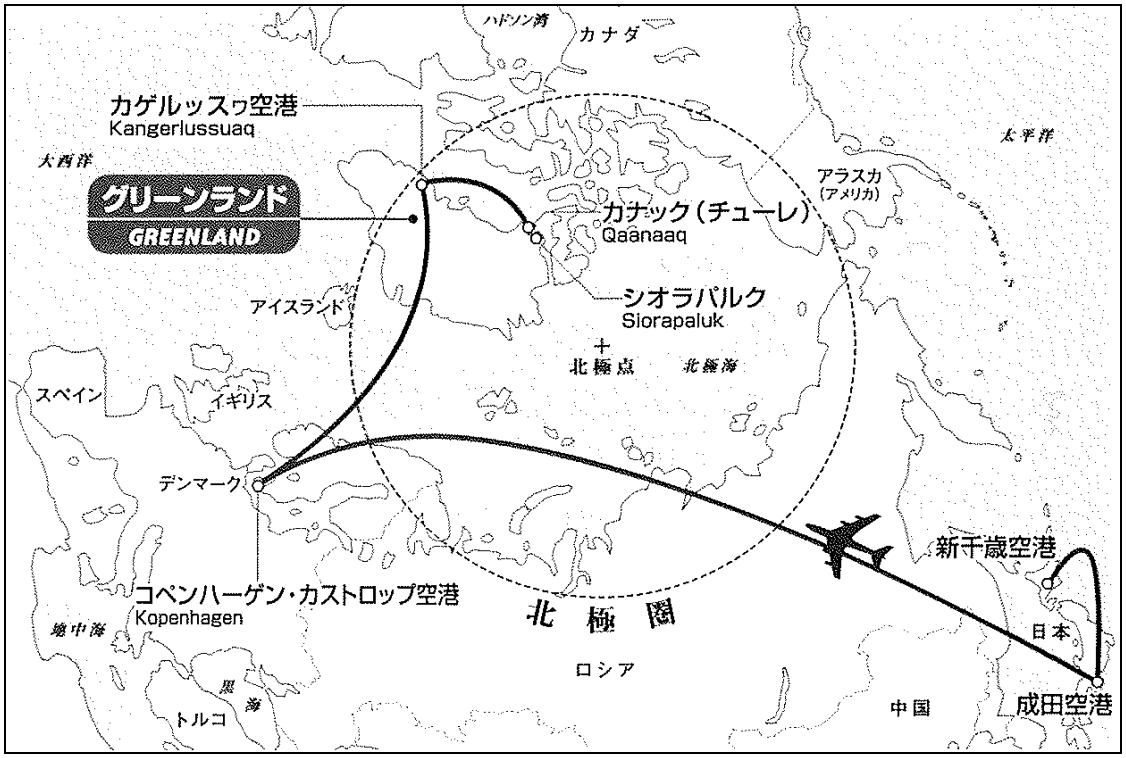


図2: 北極点を中心に捉えたグリーンランド、デンマーク、日本の位置関係
（出典: 日下 (2004: 25); 地名のカナ表記など、すべて原典のまま）

Sermersooq (デンマーク語 Sermersooq Kommune) には2013年7月1日時点で21979人が居住しており、その内、約16,000人がヌークに居住する（出典: *Kalaallit Nunaanni Naatsorsueqqissaartarfik*; www.stat.gl）。

1728年に築かれたヌークは20世紀に入り近代化が進み、現代では大規模商業施設や集合住宅の建設によりその姿をさらに変えつつある（前頁の写真１）。自治政府や議会の所在する政治と経済の中心地としてのみならず、グリーンランド大学（Ilisimatusarfik / Grønlands Universitet）を擁する教育と文化の中心地でもある。

日本からグリーンランドへ向かう航路は幾つかあるが、本稿で扱うヌークに限定すれば、航路は（例えばコペンハーゲン経由で）レイキャヴィークからヌークへ向かうものに限られる。客席数40弱の双発ターボプロップ旅客機（プロペラエンジンを二機搭載した旅客機）で約３時間の道のりである（なお、カナダの首都オタワ等からカナダ北東部Nunavut準州のIqaluitを経由する航路もあるが、日本から向かうことを前提とすると決して現実的な航路とは言えない; 詳細は航空会社 Air Greenland のウェブサイトを参照されたい: www.airgreenland.com）。

既に度々言及してきたように、グリーンランドはデンマーク王国の一領土でありながら自治権を認められている。16世紀以降、キリスト教の布教などを目的としてヨーロッパ人の流入が進み、18世紀前半、かつて南部に居住していたとされるバイキング（の末裔）の調査やキリスト教の布教、領土拡大などを目的として、13世紀以降領有権を主張してきたデンマーク・ノルウェー二重王国による正式な植民地化が始まる。キール条約の締結された1814年からはデンマーク単独での領有となり、その後、1953年に「植民地」ではなく「海外に所在する一行政区画」として位置づけられる。第二次世界大戦中のナチス占領下ではアメリカ合衆国にグリーンランドを保護された期間があるものの、その後もグリーンランドはデンマーク王国の領土として位置づけられている。

領土とはいえ単なる植民地としての位置付けではなく、例えば戦後間もない時期からデンマーク議会に代表を送る権利を有しており、また、1979 年にはこれまで度々言及してきた自治権（英語では home rule, デンマーク語では hjemmestyre）をデンマーク政府より認められており、自治政府や議会も存在する。2009 年には外交や防衛を除く全ての権利を含む自治権（英語では self-government, デンマーク語では selvstyre）を委ねられており、またデンマーク王国の一部でありながら EU（欧州連合）に加盟しないなど政治や経済における独自性を保持している。

2013 年 7 月 1 日時点でのグリーンランド全人口の内、88%がグリーンランドで出生しており、11%がデンマーク本土での出生、そして残りの 1%がその他の国や地域での出生であるという（出典: *Kalaallit Nunaanni Naatsorsueqqissaartarfik*; www.stat.gl）。ちなみに、グリーンランド人男性と結婚しヌークに十数年在住する日本人からの私信（2013 年 9 月 12 日）によると、デンマーク語が公用語に準ずる役割を果たすが故に、昨今は（デンマーク語が理解可能である）ノルウェー語やスウェーデン語を母語とする人々も移住しつつあるという。

**2.3 デンマーク語**

デンマーク語は印欧語族のゲルマン語派の一言語であり、ノルウェー語やスウェーデン語、アイスランド語、そして上述のフェロー語とともに北ゲルマン諸語（ノルド諸語とも）と呼ばれるグループを形成する。

一般的にアイスランド語は中世期やそれ以前の姿を未だに色濃く残していると言われるが、デンマーク語はまさにその対極に位置づけられる言語であり、その通時的変遷の過程において形態統語論の点で著しい簡略化を被っている。この意味で、デンマーク語はノルド諸語の中で最も革新的（radical）な言語であり、「最もノルド語らしくないノルド語」と言える。

上述の通時的変遷の結果、デンマーク語の形態論及び統語論は極めて単純なものとなっている。確かに、現代英語には存在しない名詞の「性（gender）」の区別や形容詞における「性と数（number）の一致」といった現象はあるものの、名詞の「格」に関しては人称代名詞においてのみ主格、目的格、属格の区別を残しており、動詞に至っては時制の区別はあるものの人称の区別は無い（いわゆる「三人称単数現在」の語形すら存在しない！）。このような形態論的な単純さから容易に推察されることであるが、現代英語と同様に統語論では語順が重要な役割を果たす。

語彙の面では地理的な要因からドイツ語からの借入語が多く、特に中世期のハンザ同盟の影響から低地ドイツ語（現代オランダ語）と語源を一にする語が多い。従って、（非常に乱暴な形容の仕方ではあるが）現代デンマーク語は「英語の文法にドイツ語の単語を当てはめたような言語」と言えばその姿を容易に想像できるかもしれない。

上述の「最もノルド語らしくないノルド語」という性格は音韻論においても顕著であり、ノルウェー語（の諸方言）やスウェーデン語において特徴的な「反り舌音（retroflexes）」やアイスランド語において特徴的な無声の鳴音（voiceless sonorants）は無く、従って、音素目録の点では全体として英語やドイツ語のそれに類する。また、その他のノルド諸語が共通して有する重子音（geminates）もデンマーク語には無く、音節構造の点でも「ノルド語らしさ」を欠いている。

筆者のこれまでの分析では、デンマーク語には次頁の表１や次々頁の図３に示す音素が立てられうる（Mimura 2009: 8）。韻律的な面では他のノルド諸語と同様、ストレスアクセントを有するが、ノルウェー語やスウェーデン語とは異なり主強勢を有する音節に現れる音調の遷移（通常、「高さ/ピッチアクセント」と

表1: デンマーク語の子音音素（Mimura 2009: 8）

| | Bilabial | Labio-dental | Alveolar | Palatal | Velar | Uvular | Glottal |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Plosive | p b<br>[pʰ] [b̥] | | t d<br>[tʰ] [d̥] | | k g<br>[kʰ] [g̥] | | |
| Fricative | | f v<br>[f] [ʋ̥] | s<br>[s] | | | ʁ<br>[ʁ̥] | h<br>[h~ɦ] |
| Affricate | | | (ʧ ʤ)<br>([t͡ʃ d͡ʒ]) | | | | |
| Nasal | m<br>[m] | | n<br>[n̥] | | ŋ<br>[ŋ] | | |
| Approxi-ment | w<br>[w(β̞)~ʋ̞] | | ð<br>[ð] | j<br>[j̥~ɪ̯] | | ʀ<br>[ʁ̞] | |
| Lateral | | | l<br>[l̥] | | | | |

して位置づけられる; cf. 三村 2012）は音韻論的には有意義ではない。その一方で、デンマーク語では（主）強勢を有する音節に喉頭緊張の一種である *stød* と呼ばれる現象が現れることがあり、その有無の点で知的意味が弁別されるミニマルペアも存在する（Mimura 2009: 110; デンマーク語学の慣例に倣い、stød をアポストロフィで表記する）:

（2）最小対の具体例

a. *hund* [hún’] ‘dog’ — *hun* [hún] ‘she’

b. *mand* [mén’] ‘man’ — *man* [mén] ‘one, people’

c. *el* [él’] ‘alder’ — *el* [él] ‘electricity’

## 3. ヌークの言語事情

これまで言及してきた通り、グリーンランドでは、土着の言語でありかつ公用語である東エスキモー語東グリーンランド方言（以下、グリーンランド語とする）に加えて、デンマーク語も公用語に準ずる機能を果たしている。管見に及ぶ範囲では、グリーンランドの中でも「州都」としての機能を果たす最大の都市ヌークは、いわゆる二言語併用社会である。

一口で「二言語併用」とは言っても、其の実、表わしている状況は個々の国や地域により実に多様である。とりわけ「英語学習（教育）熱」が病的なまでに高まっている昨今の日本では、「バイリンガル」という言葉が非常に緩い定義のまま、あるいは定義すらしないまま安易に用いられており、結果として多言語使用という概念そのものが誤解されているきらいがある。そこで、本節では、先行研究や筆者の調査資料に基づいてヌークを二言語併用社会と規定しうる様々な言語事情を報告し、ヌークにおける言語併用の現状について概観する。

まず、グリーンランドの言語政策、特に法的な側面に関して整理しておく。1979 年の自治権の発効以降、グリーンランド語とデンマーク語が等しく（役所や官公庁における）公共業務において使用され、またグリーンランド語がグリーンランドにおける主要な言語であることが明文化された（Langgård 1992: 112; Møller

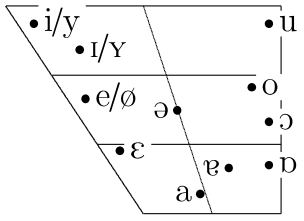


図3: デンマーク語の母音音素
（Mimura 2009: 8）

1988:177）。その後、2009 年の自治権の拡大の際に、グリーンランド語がグリーンランドの唯一の公用語であることが定められ、「グリーンランド自治法（Lov om Grønlands Selvstyre あるいは Selvstyreloven）」の第 7 章・第 20 条（Kapitel 7, §20）に公用語としての位置付けが明記されている[4]。

なお、法的な側面に関連してヌークにおける言語教育に関して若干の補足をしたい。言語教育の実状に関しては Breinholdt Larsen (1992) など比較的詳しい記述があるもののヌークに特化した研究報告ではなく、また二十数年前の成果ということもあり数字の上での古さは否めない。そこで、ここでは、学問的な厳格性を犠牲にはするものの、一ヌーク市民の「生の声」として先述のヌーク在住の日本人から伺った話を基に、ヌークにおける言語教育について概略を述べる。

ヌークでは、日本の小・中学校に相当する folkeskole の入学時から、グリーンランド語の授業に加えてデンマーク語が必修科目として学習されるという。1990 年代まではグリーンランド語の教育が十分ではなく、当時の教育を受けた現在 30〜40 歳代の政治家の中にはグリーンランド語の運用能力のを著しく欠く場合もあり、グリーンランド語を継承する上で問題視されていたそうだが、既に触れた 2009 年の自治権の拡大を機にグリーンランド語のみが公用語として位置づけられ、改善が図られているという。なお、「グリーンランド語のみが公用語」とはいえ、教育の現場ではデンマーク語を外国語として認識してはいないとのことである。

地域により若干の差異はあるものの、少なくとも日本の中学校に相当する学年まではデンマーク語の授業（加えて英語の授業も）があるが、デンマーク語の能力には個人差が見られるという。ヌークのような都市部では、両親（あるいは少なくとも父母の片方）がデンマーク本土で生まれ育ったためグリーンランド語の運用能力が全く無いという家庭もありうるというが、そのような家庭に生まれ育った子供と（例えば幼稚園などで）幼い頃から接してきた子供であれば、グリーンランドで生まれ育った子供であってもデンマーク語の運用能力が高いという（ちなみに、デンマーク語に対して極端に否定的な態度を示すグリーンランド人はあまりいないとのことだが、先に述べたような経緯から幼少よりデンマーク語に接している子供はデンマーク語に対する印象も肯定的であるという）。

なお、デンマーク本土へ一種の「留学」をする子供達も少なくなく、そこでデンマーク語の運用能力を高める場合もあるという。例えば、両親（の一方）が本土で生まれ育った人物であれば、14〜15 歳くらいになると子供を親戚に預け、現地の学校での教育を受けさせるという。背景としては、ヌーク（のみならず、おそらくグリーンランドの都市部全て）ではデンマーク語の能力があることで職業選択の自由度が高まるという事情があるとのことで、現に、自治政府の官僚にはこの「留学」経験者が多いそうである。ちなみに、グリーンランド大学での授業は全てデンマーク語で行われ、英語による授業はないという。

続いて、実際の言語使用の面に目を移す。便宜的に、「文字を通じての使用」と「音声を通じて（口頭での）使用」の二つの使用状況に大別して話を進める。まず「文字を通じての使用」に関してであるが、1979 年発効の「自治法」が謳う通り、ヌーク市内での社会生活の様々な場面において、グリーンランド語とデンマーク語のほぼ対等な位置付けが実現されているように伺える。新聞や雑誌は言うに及ばず、銀行や郵便局に備え付けられている支払用紙から図書館に設置されている利用者登録やインターネット利用の申し込み用紙、更には鮮魚店（とはいえ魚類よりも鯨やアザラシなどの哺乳類の方が売り場の面積を占めているが）に掲げ

写真２: 鮮魚店の鯨肉のリスト
（筆者撮影 2013 年 9 月 12 日）

写真３: 「目玉商品」の看板
（ちなみに「目玉商品」は豚の心臓
筆者撮影 2013 年 9 月 12 日）

た品目と値段のリスト（写真２）やスーパーマーケットの「安売り目玉商品」を知らせる看板（写真３）に至るまで、グリーンランド語とデンマーク語による表記がなされている。特に新聞や雑誌に関しては、ほぼ同一の内容の文章を二言語で記してある（いわゆるパラレルテキスト; 次頁の写真４を参照)。

筆者の調査した範囲では、この他にも次のようなものに二言語での併記が確認された:

（３）二言語併記の具体例

a 時間割

前述のヌーク在住邦人から拝見した時間割には、曜日名はデンマーク語で表記がなされているが、授業名はグリーンランド語とデンマーク語での併記がなされている（例えば、「デンマーク語」であれば qallunaatut/dansk、「宗教」であれば upperisarsiomeq/religion；尤も、担任教員の裁量に一任されている可能性もあり、また学校によって異なる方式をとっているかもしれない)。

b. 図書館等の施設の掲示物

例えばコピー機の使用料金など、館内の利用に関する案内はグリーンランド語とデンマーク語によるパラレルテキストである（稿末の付録写真１を参照)。

c. 道路標識

例えば、「駐車禁止」の標識や近所に学校が所在するためドライバーに注意を促す標識、病院の所在を表わす標識（看板）など、数語から成る簡潔なものではあるがグリーンランド語とデンマーク語の二言語による併記である。なお、「通り」の名称を示す標識は、そもそも「通り」の名称が固有名詞であるためか、一方の言語による表記である（但し、“Steffen Møllerip Aqqutaa”

ARKIVFOTO: SERMITSIAQ AG

# CIA-p nunatsinnut aqqusaartarnera

Sooq Mittarfeqarfiit qinnuigineqanngillat minnermut ilaasunullu akitsuutinik akiliisitsiniartassasoq.

Ilisimasakka malillugit nunatsinni mittarfinnut timmisartumik mittoqarsinnaanngilaq minnermut ilaasunullu akitsuutinik akiliinani, taakkulu Mittarfeqarfiit akilersinniagassaraat.

Taamaasilluni Namminersorlutik Oqartussat naatsorsorsinnaavaat minnerit qanoq amerlatigisut pisimanersut, ilaasut qanoq amerlatiginersut aammalu minnerit sumut qangalu pisimanersut.

Tamanna ilutigalugu Mittarfeqarfiit naatsorsorsinnaavaat mittarnerni tamakkunani Namminersorlutik Oqartussat qanoq amerlatigisunik aningaasarsiornersut.

*All.: Knud Østergaard, Nuuk*

# CIA landinger i Grønland

Hvorfor beder man dog ikke Mittarfeqarfiit om at gå sine opkrævninger af landings- og passagerafgifter igennem.

Der kan mig bekendt ikke lande et fly i en grønlandsk lufthavn, uden at der skal betales landings- og passagerafgift heraf, som opkræves af Mittarfeqarfiit

Selvstyret, der før hed Hjemmestyret, kan således selv lave opgørelsen over, hvor mange landinger, der har været tale om, hvor mange passagerer, der var ombord, og hvor og hvornår de fandt sted.

Ved samme lejlighed kan Mittarfeqarfiit så opgøre hvor meget man, dvs. Hjemmestyret eller Selvstyret, har tjent på disse landinger.

*Af Knud Østergaard, Nuuk*

写真４: 日刊紙 *Sermitsiaq*（2012 年 6 月 22 日付）より
（上段がグリーンランド語、下段がデンマーク語）

「Steffen Møller 通り」の様に、それぞれの言語から形態素を組み合わせて命名する事例もある）。

d. 公共施設や商業施設の開館（営業）時間

“Ammasarfiit/Åbningstider Ataas./Man.-Tall./Fre: 09:00-11:00”「開館時間 月～金曜日: 09:00～11:00」のように、「時間」の表示以外は全てグリーンランド語とデンマーク語の二言語表記。

e. バスの時刻表や路線図:

停留所名（つまりは地名）自体は当然のことながらグリーンランド語表記であり、また時刻はこちらも当然のことながらアラビア数字による表記であるが、例えば、「路線図」や「環境に配慮してバスを利用しましょう」といったその他の文言は、“Angalaffissat / Køreplan” や “Avatangiiseq eqqarsaatigalugu -- bussertarit / Tænk på miljøet -- tag bussen” の様に、二言語による表記である。

一方、（３）に示した具体例と同じく公的な使用を前提としながらも、一言語のみによる表記を採用してい

**Naalakkersuisoq innartortoq**

Nunamut namminermut, pinngortitamut avatangiisinullu naalakkersuisoq Anthon Frederiksen naalakkersuisutut Savalimmiunut tikeraarnerminut atatillugu qangatut piniariaatsimik inunnut portusuumiinnermik nangiarisalinnut naleqquttuunngitsumik misiliivoq. Periuseq taanna mannissarniarnermi imaluunniit savamik innassimasumik tigusiniarnermi Savalimmiormiunit atorneqartarpoq. Tassalu Siga imaluunniit ilisarnarnerusumik nutserlugu: Innartornermik.
Tamanna pivoq Savalimmiuni qeqertat kujasinnersaanni Suðuroyimi, tassani Anthon Frederiksen nunaqarfimmi Hvalbami naatsorsuutiginngisamik innartornissamik neqeroorfigineqarmat. Tamanna sioqqutitsiarlugu ministereqatimi Savalimmiormiup misiliinera Frederiksenip isiginnaarpaa, Frederiksenilu innakkut anorlerajuttukkut ammut 40 meterikkut ajunngivissumik ninginneqarpoq.

**Minister i stram line**

I forbindelse med sit ministerbesøg på Færøerne prøvede medlem af Naalakkersuisut for indenrigsanliggender, natur og miljø, Anthon Frederiksen, en ældgammel fangstmetode, som ikke er for folk med højdeskræk. Metoden bruger færingerne, når de skal indsamle æg eller hente får, der af en eller anden grund er kommet på afveje. Nemlig Siga, eller oversat til det mere moderne: Rapelling.
Episoden fandt sted på øen Suðuroy, som er den sydligste ø på Færøerne, hvor Anthon Frederiksen i bygden Hvalba fik et uventet tilbud om at blive firet ned ad fjeldet. Frederiksen havde kort forinden set sin færøske kollega tage turen. Det afgjorde sagen, og Frederiksen lod sig i fin stil fire 40 meter ned ad den forblæste klippeside.

**Minister on a tight rope**

In connection with his state visit to the Faroe Islands, Greenland's minister of Domestic Affairs, Nature and Environment, Anthon Frederiksen tried an ancient hunting method which is not for people with fear of heights. The method is used by the Faroese to collect eggs or round up sheep that for some reason have gone astray. It is Siga, or in a modern translation: Rappelling. The event took place on the island of Suðuroy, which is the southernmost of the Faroese islands. In the village of Hvalba Anthon Frederiksen received an unexpected invitation to be lowered down the cliff. Shortly before, Frederiksen had seen his Faroese colleague do the same. That settled it, and Frederiksen allowed himself to be lowered in grand style down the 40 metre high, windy cliff face.

写真５: Air Greenland の機内誌 *Suluk*（2013#1）より
（グリーランドの大臣を扱った記事; 左からグリーンランド語、デンマーク語、英語による）

るもの（あるいはその傾向が強いもの）、あるいはその他の言語を含めた併記を採用するものもある:

（４）二言語表記ではない（あるいは一言語による表記の傾向が強い）もの

a. 商店名や企業名

固有名詞故に一方の言語のみによる表記が主流と思われる（なお、*Brugseni*（デンマーク本土のスーパーマーケット *Brugsen* にグリーンランド語の形態素 *-i* を付加したもの [5]）のように、それぞれの言語の形態素を組み合わせた興味深い事例も存在）

b. 食料品のパッケージやラベル

基本的に食料品のほとんどがデンマーク本土からの輸入品のため、パッケージやラベルはデンマーク語のみによる表記である。しかし、グリーンランドへの輸出を前提として作られたものであろうか（詳細は不明）、牛乳パックのように英語も含めた三言語による併記がなされているものも存在する（稿末の付録写真２を参照）。

c. 観光施設

観光施設（観光案内所や博物館など）内部の案内板やそこで配布されているパンフレットなどは、英語のみによる表記を採用する場合が多く、仮に二言語による併記を採用していたとしても、グリーンランド語と英語によるものがほとんどである（例えば、グリーンランド国立博物館の展示物の解説はグリーンランド語と英語による）。また、グリーンランドの航空会社 Air Greenland の機内誌 *Suluk* は（多くの国際線の機内誌がそうであるように）英語での表記がなされているが、加えてグリーンランド語とデンマーク語の三言語によるパラレルテキストである（写真５）。

写真6: 落書き
（ヌーク市内の某ファーストフード店のトイレにて; 筆者撮影 2013 年 9 月 12 日）

ちなみに、観光案内所等で入手可能である地図は、グリーンランド語、デンマーク語、英語の三言語の他にドイツ語も加えた四言語によるパラレルテキストとなっている[6]。

なお、先に述べた新聞や Air Greenland の機関誌 *Suluk* など、パラレルテキストの体裁を採る印刷物は少なくないが、ある言語から他の言語へ翻訳しているのか、あるいはそれぞれ独立して文章を作成しているのか、その詳細は残念ながら現時点では不明である。

また、近年、デンマークの社会言語学において、特に（移民も含めた）若年層の言語使用の状況を窺い知る資料として注目されている「落書き」を観察してみたところ（写真6）、デンマーク語によるものも幾らか見られるが、（筆者のグリーンランド語の知識が極めて乏しいため、推察の域を脱し得ないが）グリーンランド語が優勢ではないかと思われる。

最後に、「音声を通じての（口頭での）」言語使用の状況に関して述べる。筆者の主観的な観察に基づくという点で甚だ学問的な厳密さを欠きはするものの、簡便かつ平易な形容を試みて敢えて卑近な表現を用いるならば、ヌークにおいてデンマーク語は非常に良く「通じる」。

筆者の体験に基づき、より具体的な事例を引くならば、例えば、図書館の職員や書店の店員とのやり取りや、宿泊施設のフロントでの会話、レストラン等の飲食店での注文の際の会話など、こちらがデンマーク語で話しかければ当然の如く全てデンマーク語で返答が帰ってくる。グリーンランド語はもちろん、英語で返答されることはない。言うまでもなく、図書館の職員にせよ、書店の店員にせよ、宿泊施設のフロントにせよ、飲食店の接客係にせよ、デンマーク語のモノリンガルというわけではなく、グリーンランド語での問いかけにはグリーンランド語で応じている。無論、発音や流暢さなど運用能力の点で個人差は観察されるものの、筆者がデンマーク語で話しかけてその他の言語で返答されたという経験は皆無に等しい[7]。

また、特筆に値すべき点であると思われるが、既に触れた図書館等の諸々の場所において、反対に筆者が話しかけられた場合も、その言語はほとんどの場合がデンマーク語であり、グリーンランドであることは極めて稀であった（英語であることは皆無であった）。なお、ヌークの町中で見かける人々の典型的な風貌は、いわゆる「イヌイット」と呼ばれる人々のそれであり、（浅黒く日焼けした肌の色を除けば）どこか日本人にも通ずる風貌である。それ故か否かは定かではないが、道端ではグリーンランド語で話しかけられたことも何度かあった。とはいえ、グリーンランドでは古くからノルウェーやデンマーク本土の人々との婚姻が少なくなく、その結果、我々アジア人の目からは西洋ないし北欧的な顔立ちに見える容姿であり、かつデンマーク語を操りながらも、（4.3 節にて後述する諸特徴から判断して）おそらく母語はグリーンランド語と思われる人々も珍しくはない。

最後に、同じく音声を通じた言語使用という観点から、テレビで使用される言語に関して筆者の経験と観察に基づき簡略に述べておく[8]。グリーンランドには公的資金により運営されている *KNR* (*Kalaallit Nunaata Radioa*) という放送協会があり、テレビとラジオのいずれにおいても放送活動を行っている。番組数は決して多くはなく、基本的には、数種類の番組を一日に数回繰り返し放送しているようである。グリーンランドのニュースや天気予報が主たる番組であり、時には政治家や教育者などをゲストに迎えるトーク番組や討論番組も放送されるようである。これらの番組は基本的にはグリーンランド語による放送であり、筆者の記憶している範囲では、ニュース番組でのみデンマーク語による字幕が添えられていた。なお、興味深いことに、例えば番組中にインタビューを受けた人物がデンマーク語を話している場合グリーンランド語による吹き替えが被せられるが、このような場合にもデンマーク語による字幕が添えられる。

また、筆者の視聴した *Tamassa* というトーク番組（2013 年 9 月 16 日放送）では、二人のゲストがそれぞれグリーンランド語とデンマーク語を話す人物であったが、司会者はそれぞれのゲストとそれぞれの言語で会話をしており、興味深いことに、いずれの言語が使用されている場面でも、画面には字幕は一切添えられていなかった（なお、*KNR* の番組はインターネットでの視聴も可能であり、同番組も 2014 年 1 月 31 日時点で、http://www.knr.gl/da/tamassa にて視聴可能である）。

ヌークには *KNR* の他にも *Nuuk TV* というローカル局が存在し、グリーンランド語による放送を行っている。ちなみに、グリーンランドのテレビ放送の番組数が少ないことは既に述べたが、デンマーク本土の放送局の番組含めると、その選択肢は相当なものとなる。尤も、デンマーク本土の番組を視聴するにはデジタル放送（ケーブルテレビ？）に加入・契約する必要があるようである。

また、デンマーク本土の局が放送する番組は、言わば本土からグリーンランドへ直輸入されているような

ものであり、従って言うまでもなくデンマーク語による放送であり、無論、グリーンランド語の字幕は添えられない。グリーンランドでは、子供向けの番組も含めて、娯楽性の高いものはほぼ全てデンマーク本土の放送局によるデンマーク語を使用した番組であり、ヌークの若年層のデンマーク語の運用能力にテレビが幾ばくか影響していることは想像に難くない。

さらに、デンマーク本土では例えば「イギリス放送協会 *BBC*」など海外の放送局の番組も吹き替え無しで放送することが日常的に行われており、このような番組はグリーンランドでも（しかるべきサービスに加入していれば）視聴が可能である。このようなテレビの影響により、おそらく十数年前のグリーンランドに比べて現在の人々は音声としての英語に接する機会が相当増えたのではないだろうか。

## 4. ヌークにおけるデンマーク語

### 4.1 先行研究

ヌークの言語事情に関する記述は、例えばグリーンランドに関する概説書などにおいてこれまで断片的にはなされてきたものの、研究論文や研究書の形での報告は決して多くはない。確かに、Langgård (1992) や Normann Jørgensen (2004/05) など、特に若者の言語使用を扱った社会言語学的な研究が活発になされるようになってきたものの、論文や研究書の執筆に使用されている言語がデンマーク語にほぼ限られているという事情から研究テーマとしての海外での認知度は未だ低く、今後の研究の発展が俟たれるのが現状である。

さらに、ヌークで使用されているデンマーク語それ自体を対象とした研究はなおさら少なく、管見に及ぶ範囲では Jacobsen (1998/99) の実験音声学的研究を除いてはおそらく皆無であると言っても過言ではない。

### 4.3 言語的特徴

#### 4.3.1 音声・音韻的特徴

分節音にまつわる特徴と韻律的特徴に大別し、主立った特徴を列挙していく。まず分節音に関してであるが、グリーンランド人の話すデンマーク語には以下のような特徴が観察される:

（5）a. 閉鎖音 /p, t, k/ の気音の度合い

標準デンマーク語には閉鎖音は「両唇」、「歯茎」、「軟口蓋」の三つの調音位置で区別され、無声の系列 /p, t, k/（研究者によっては「有気」と解釈する場合有り; cf. Grønnum 2005, 三村 2009）は非常に強い気音を伴って実現する。一方、グリーンランド語には破裂音は無声音のみで /p, t, k, q/ の四つが認められており、いずれも気音は著しく弱い。このような言語間の差異故か、グリーンランド人の話すデンマーク語では、無声破裂音の気音がおしなべて弱い印象を受ける（無論、個人差も大きく、デンマーク語の習熟度や流暢さとも相関関係があると思われる）。

b. 歯茎閉鎖音 /t/ の音価

デンマーク語の /t/ は、厳密には前舌面 (the front of the tongue) と歯茎後部 (alveolar ridge) により閉鎖が作られ、また先に述べたような強い気音を伴うため、結果として破擦音 [ts] に著しく類似した音価を伴って実現する。グリーンランド語の /t/ の音価に関する詳細は不明であるが、おそらくグリーンランド語の影響のためか、グリーンランド人の話すデンマーク語では /t/ は舌尖と後部歯茎 (plato-alveolar) 周辺で閉鎖が作られ、かつ舌尖の僅かな反りを想起させる暗くこもった音色を伴っている。この /t/ にまつわる特徴は、流暢さの度合いが比較的高いと思われる話者であっても観察された。

c.「柔らかいd」の調音

デンマーク語ではdの文字で綴られる音には、閉鎖音として発音されるもののほか、デンマーク語学において「柔らかいd（et blødt d）」と呼ばれる前舌面と歯茎後部で狭窄の作られる接近音として発音されるものとがある。この「柔らかいd」はグリーンランド語には存在しない音であるが、比較的習得し易い音なのであろうか、筆者の観察では、ほとんどの話者がデンマーク語の「柔らかい d」と見なして差し支えない程度の音価で発音していた。無論、デンマーク語の習熟度や流暢さの度合い等に関連して個人差が観察され、話者によっては /l/ に近い音で置き換える場合もあるように思われる。

続いて韻律的特徴に移る。以下に示すような特徴が確認された:

（6）a. 'stød' の有無

既に2.3節において述べたように、デンマーク語の発音を特徴付ける韻律的現象として stød と呼ばれる声門狭窄の一種がある。グリーンランド語には stød に相当する現象や調音は存在せず、従って、デンマーク語の流暢さや習得の度合いが比較的低いと感じられる話者の発話においては stød が全く現れないようである。また、比較的デンマーク語が流暢な話者であっても、声門閉鎖音で置き換えたやや誇張された stød が現れることが多いようである。無論、話者に依っては、標準デンマーク語の stød と比べて全く差異を聞き取ることのできないくらいの調音を行う人物もいるが、筆者の観察では、標準デンマーク語において stød が現れる音環境の全てにおいて stød が現れるわけでなく、本来ならば stød を伴うべき語であるにもかかわらず stød を伴わない発音も確認された。詳細は今後の研究を俟たざるを得ないが、stød の分布を規則として習得しているのではなく、（語の使用頻度等の要因と関連して）個々の語に関して個別的に stød の有無を記憶しているのではないだろうか。

b. 音調（イントネーション）とリズム（強勢）

個々の分節音の調音もさることながら、文や発話全体に被さる音調（広義のイントネーション）も「流暢さ」の印象を左右する重要な特徴である。従って、おそらくデンマーク語の習得の度合いが高いと考えられる話者の発話では取り立てて「外国人的」な印象を受けることは少ないが、その一方で、デンマーク語の習得の度合いが低いと考えられる話者の場合は、全体的な抑揚が乏しく平坦な印象を受ける。

これは、音調それ自体ではなく、むしろリズムの仕組みに要因が隠されているのではないかと思われる。デンマーク語は英語と同じく強勢を伴う音節を拍とするリズムであるが、グリーンランド語は個々の音節（モーラ）が拍を担うリズムであるという (Rischel 1974: 78-82)。デンマーク語のような「強勢拍リズム」であれば発話を構成する複数の音節の中で卓立の度合いに差異が生まれ、その結果、リズムの強弱が伴い全体的な音調の抑揚が産み出されるが、グリーンランド語のような「音節（モーラ）拍リズム」の場合は、全ての音節がほぼ均等に卓立するため音節間での聴覚的な強弱の差は生じず、結果として抑揚のない平坦な印象与える。

c. 母音の長さ

グリーンランド人の話すデンマーク語では、強勢を伴う長母音が著しく短く、あるいは短母音として実現する傾向が強いようである。デンマーク語の母音には（音声的には; 表層上は）長短

の区別はあるものの、綴りには反映されていない。一方、グリーンランド語には例えば ‘a’ に対して ‘aa’ のように綴りの上でも音声・音韻的にも母音量の区別をつけることが可能である。従って、可能性としては、デンマーク語の綴りが影響して長母音をしかるべき母音量で発音しないということも考えられる。しかし、既に述べたリズムの構造の違いがむしろ主たる要因として関与しているのではないだろうか。グリーンランド語は「音節（モーラ）拍リズム」の言語であるといわれており、従って、「強勢拍リズム」の言語であるデンマーク語のように、強勢の有無に応じて母音量が変化するという現象は生じにくく、むしろ、各音節の母音をそれぞれ均等に発音していく傾向が強いことが予想される。そのため、グリーンランド語を母語とする者には母音量の区別、特に長母音を長く発音することが難しく、結果として、しばしば長母音が寸詰まりに聴こえるのであろう。

#### 4.3.2 形態・統語論的特徴

本稿において報告する調査では音声的側面に主眼をおいており、従って、形態論や統語論に関してはとりわけ指摘すべき特徴は得られていない。また、インフォーマントや現地の人々とデンマーク語で会話した際の観察でも、特筆すべき形態・統語論的特徴は得られなかった。

#### 4.3.3 語彙的特徴

先述の通り、語彙に関する調査も今回は実施しておらず、従って、量的にも質的にも信頼のおける資料は得られていないが、インフォーマントや現地の人々との会話を通じて、語彙項目に関して大変興味深い点に気付いた。それは、デンマーク語の文中に時折ノルウェー語の単語が使用されるという点である。

観察された事例は僅かに二例で、数詞と「鍵」という語彙項目である。まず、数詞に関して。デンマーク語は「20」以上の数詞は二十進法に基づいて作られており、例えば「60」を意味する tres は 古くは tresindstyve「3 (tre) × 20 (tyve)」という数詞「20」を含む複雑な仕組みであったことを読み取ることができる。一方、ノルウェー語では「60」は seksti といい、英語やドイツ語と同じく「6 (seks)×10 (ti)」という単純な仕組みで成り立っている。筆者がデンマーク語で会話した或るグリーンランド人は、デンマーク語的な tres ではなくノルウェー語的な seksti を用いていた。

また、このグリーンランド人とは別人であるが、或るグリーンランド人は「鍵」に相当する語として nøkkel [nøkkəl] という語を使用していた。デンマーク語では「鍵」のことを nøgle [nɔjlə] というが、音変化を経たため音形の点ではやや異なるものの語源的には起源を一にする。

上述の二人のグリーンランド人が、なぜデンマーク語の会話の中でノルウェー語の単語を用いたのかは全くもって不明であるし、そもそも自らが用いた語がノルウェー語であると自覚しているのかも定かではない。さらに、これら二つの事例は筆者が会話の中での自然傍観を経て得た断片的な資料であるため、グリーランド人の話すデンマーク語の特徴として位置づけられるかどうかも定かではない。しかしながら、グリーンランドに初めて入植したバイキングが現代で言うノルウェー人に相当する人々であった点や、その後デンマークのみならずノルウェーにも支配されていたという点、ヌーク設立に関わった宣教師 Hans Egede が現在のノルウェーに生まれ育ったという点、そして *sava*「羊」や *musaq*「人参」などノルウェー語からの借入語がグリーンランド語に見られる（それぞれ、ノルウェー語の *sau* と *mura* に由来するという; Olsen 2005: 125）点を考慮すると、大変興味深い現象であると言える。

## 5. 記述言語学的調査の意義と問題点

### 5.1 ヌークにおけるデンマーク語が示唆するもの

ヌークにおいて使用されるデンマーク語は言語研究にいかなる貢献をもたらし得るであろうか。想像に難くない点としてまず考えられるものは、既に先行研究も幾らか存在する研究テーマではあるが、言語政策や言語教育、人々の言語や文化に対する意識など、いわゆる「多言語主義」の概念からヌークを捉える社会言語学的研究である。

また、同じく想像に難くない研究テーマとして、ヌークで使用されるデンマーク語を「ピジン」や「クレオール」（cf. Thomason and Kaufman 1988）との関連で捉えることが挙げられよう。例えば、親の代では外国語として習得したデンマーク語が子供の代では母語として獲得されるということは十分に想定されるが、このように獲得されたデンマーク語は「クレオール」として位置づけるべきなのであろうか。あるいはデンマーク語の「方言」なのであろうか。先に示した言語政策との関連で捉えていくことで、理論的に興味深い点が解明されてくると思われる。

この他にも、ヌークにおけるデンマーク語は「言語接触」（cf. Weinreich 1953）の格好の事例として、様々な問題点を提起し得ると思われる。前節にて概観したグリーンランド人の話すデンマーク語に見られる諸特徴は、まさに「言語接触」に起因する言語変化の例であるが、既に 4.3.1 節で触れたように、韻律面では「デンマーク語らしく」極めて流暢に発音する話者であっても破裂音 /t/ の音価はグリーンランド語的であるなど、同じ言語接触に起因する変化であっても「変化の生じ易さ」の点で差異が存在するようである。ヌークで話されるデンマーク語を通じて、言語接触により変化し易い構造や特徴とはどのようなものか明らかにすることが可能ではないだろうか。

また、言語接触に起因する言語変化とは、視点を変えると「第二言語の習得における母語の干渉」として捉えることも可能であり、従って、ヌークで使用されるデンマーク語を通じて、言語構造や構造的特徴の種類と干渉の程度の相関関係を明らかにすることが可能ではないだろうか。

### 5.2 二言語併用社会と記述言語学的調査の難しさ

前節では、ヌークにおいて使用されるデンマーク語が言語研究の様々な側面において貢献し得ることを述べたが、例えば言語使用に関する意識調査のように、ヌークで使用されている言語自体を調査対象としない研究を除いては、いかなるテーマで研究を進めるにせよ、デンマーク語自体を詳細に観察する必要がある。

しかしながら、既に 4.1 節にて言及したように、ヌークで使用されているデンマーク語の構造的側面に関しては未だ研究が十分には進められてはおらず、これまでヌークを含めグリーンランドで使用されてきたデンマーク語に関する記録は皆無に等しい。特に、近年、グリーンランド文化継承の名の下でグリーンランド語の社会的位置付けが顧みられているが、同じくデンマーク語の社会的位置付けも変わりつつあり、それに伴い人々の使用するデンマーク語にも幾分かの変化が起こっているのではないだろうか。このような背景を鑑みると、ヌークにおけるデンマーク語の記述言語学的な調査は急務であると言っても過言ではない。

しかしながら、その一方で、ヌークが二言語併用社会であるが故に生じる記述調査上の問題点というものも存在するのではないかと考える。ここでは、以下の二点に限定して話を進める:

（7）a. インフォーマント（調査協力者）の確保
　　b. インフォーマントの質

まず、インフォーマントの確保について。インフォーマント調査を通じて資料を採取する記述言語学的研

究においては、インフォーマントを探すことがまず第一の課題である。これは、調査地や調査対象の言語を問わず、いかなるインフォーマント調査にも伴う課題である。これまで筆者もデンマーク本土やアイスランドでの実地調査は言うに及ばず、国内で行ってきたデンマーク語やノルウェー語の調査においても、インフォーマントの確保には多大な労力を費やしてきた。何人もの方々の仲立ちを経て、数ヶ月の後にようやく出会えた話者にインフォーマントの申し出をあっさりと断られてしまった、などといった経験は一度や二度ではない。要するに、いかにしてインフォーマントを確保するかという課題は記述言語学の調査においては不可避であり、従って、取り立ててヌークや二言語併用社会に限定して起こりうる問題点であるとはいえない。

とは言え、これまでの筆者の乏しい経験と比較しても、ヌークでのインフォーマントの確保は困難を極めた。幸い、筆者はヌークへの留学経験をもつ日本人の仲立ちによりグリーンランド人数名をインフォーマントの候補者として得ていた。後は、それぞれの方に直接お会いしてインフォーマントを務めていただけるか否か交渉し、具体的な調査の方向性を定めて行こうと考えていたのだが、先述の一名の方を除いて見事にすっぽかされてしまった。

確かにそれぞれ職に就いている方ばかりであり、そのため多忙だったのかもしれない。学生であればまた状況は違ったのかもしれない。しかし筆者は、今回の調査がグリーンランド語を対象としたものではなくデンマーク語を対象としたものであったことも、原因として幾らか関与しているのではないかと考えている。ヌークは、いわゆる「ダイグロシア（diglossia）」（cf. Ferguson 1959）のようにグリーンランド語とデンマーク語との間に上下（優劣）関係が（個々人の主観的な印象は別として、客観的には）存在しない社会であり、従って、これらの方々がデンマーク語に対して否定的ないし批判的な感情を抱いているわけではないだろう。しかし、母語であるグリーンランド語と後に習得したデンマーク語では、心理的な近さという意味では前者に軍配が上がるのではないだろうか。ましてや、仕事の傍ら、限られた時間の中で我々研究者の相手をさせられるとなれば、なおさら母語ではないデンマーク語では意欲が湧かないのも無理からぬ話であろう。

続いて、インフォーマントの質の問題に移る。記述研究に携わる者にとっては、インフォーマントは「足を向けては寝られない」くらいの存在であり、従って、質をとやかく言えた義理などないわけであるが、「良質」なインフォーマントとそうではないインフォーマントというのは確かに存在する。

これまで言語学の世界で活躍してきた（そして未だに活躍し続けている）数々のフィールドワーカーと呼ばれる人々は、殊にインフォーマントの質に関してはそれぞれ一家言を持っているようで、筆者などの言を俟つまでもないのであるが、敢えて言うならば、調査対象である言語（ほとんどの場合、母語である）に対してインフォーマントがどれほど関心を持っているかという点は重要である。時には（無論、休憩を挟んで）二時間にも及ぶ長丁場の中、退屈なそぶりも（なるべく）見せず（見せないよう努めながら）調査に付き合う以上、インフォーマントを務めることなど（金銭が介する場合は別であろうが）自身が自らの言語に関心がなければなかなかできることではない。

このような自らの言語に対する「関心」という点から考えても、既に述べたインフォーマント候補の方々の行動は至極自然なことと言えよう。しかしながら、この「関心」の他にも、おそらく二言語併用社会に特有と思われるインフォーマントの質の問題があると筆者は考えている。それは、インフォーマントにとっては母語ではない、後に習得した言語の運用能力の問題である。

筆者の事例で言えば、グリーランド語を母語とするインフォーマントのデンマーク語の能力ということになるが、既に 3 節や 4.3 節において触れたように、グリーンランド人のデンマーク語の運用能力はおしなべて高いもののやはり個人差は確実に存在し、「グリーンランド人のデンマーク語」として一般化を図る上で、

この個人差をどれほどまで考慮に入れるべきなのか、あるいは捨象してもよいものなのかが、調査を進める上で（そして、資料の解釈の上で）大きな問題点となる。例えば、筆者のインフォーマントを努めて下さった方は、あまりにもデンマーク語が流暢であるがために氏のデンマーク語の発音に「グリーンランド人/語」らしさを見出すことが極めて困難であったが、一方、街で言葉を交わしたグリーンランド人の中には容易に「グリーンランド人/語」らしさを感じられる人もいた。果たして、この二人の話すデンマーク語を「グリーランド人のデンマーク語」として等しく扱うことができるのであろうか、あるいは扱ってよいのであろうか。

確かに、既に述べたように、或る音声特徴とインフォーマントのデンマーク語の能力や習得の度合いの間には何らかの相関があると考えられ、従って、例えば「習得の度合いの高い話者のデンマーク語」、「習得の度合いの低い話者のデンマーク語」といった形で条件付きの一般化を行うことは可能であろう。しかし、そのためには、「習得の度合い」を測る客観的な指標が必要となる。言語の運用能力は「読む・聴く・書く・話す」の四つの技能から総合的に判断されるべきものであって、口頭でのコミュニケーションのみを通じて判断しては不十分である。

また、前節において、グリーンランドにおけるデンマーク語を「言語接触」の枠組みで捉えることの可能性を示唆したが、グリーンランド人のデンマーク語に見られる諸特徴を言語接触を通じて生じた「変化」として捉えることは時期尚早かもしれない。というのも、グリーランド語を母語とするほとんどの人々にとってデンマーク語は教育を通じて学ぶものであり、彼等のデンマーク語に見られる「グリーランド人/語」らしさは、言うなればデンマーク語の習得が「不完全」であることを意味するためである。無論、このような「不完全な習得」や「誤用」が言語変化の契機となりうることは「ピジン」や「クレオール」の研究において唱えられて久しいが、「誤用」とインフォーマントの単なる個人的かつ一時的（偶発的）な癖とを区別するのは容易ではない[9]。また、「誤用」と「言語変化」を明確に区別するには相当数の話者からの資料が必要であるが、既に指摘したインフォーマントの確保の問題も残されている。

グリーランドで使用されるデンマーク語の記述研究はまだまだ緒に就いたといってよい段階であると思われるが、本節において概観した二つの問題点を解決せずして研究の進展は期待できないであろう。

## 6. 結語

以上、本稿では、筆者がヌークにおいて実施したフィールドワークの報告を行った。ヌーク市内での社会生活に関わる言語使用の状況を中心に報告するとともに、筆者の観察に基づいてヌークで使用されているデンマーク語の概略を述べた。また、実地調査の経験を通じて、二言語併用社会であるヌークにおいて第二言語であるデンマーク語の記述調査の難しさや問題点についても私見を述べた。

今後、記述研究調査を進めるにあたって乗り越えるべき課題は少なくはないものの、ヌークで使用されているデンマーク語の研究を通じてもたらされる成果は計り知れないものであろう。課題を少しでも克服すべく、そしてヌークで使用されるデンマーク語の全体像を明らかにすべく、筆者の他に一人でも多くの研究者がグリーンランドやヌークという地に魅力を感じてくれることを心から期待する。

付録

付録写真１: コピー機とファックスの利用料金
左がグリーンランド語、右がデンマーク語;
但し、絵の左側や※印の箇所などは上段がグリーンランド語、下段がデンマーク語
（グリーンランド公立中央図書館（Nunatta Atuagaateqarfia/Det Grønlandske Landsbibliotek）にて;
筆者撮影 2012 年 9 月 13 日）

付録写真２:Arla 社（デンマーク）の牛乳パック
左側上段が英語、左側下段がデンマーク語、右側がグリーンランド語

付録写真３: 自動車ローンのパンフレット
正面左側がグリーンランド語、右側がデンマーク語
（グリーンランド銀行 Grønlands Banken にて）

**謝辞**

本小文に貴重なご意見を下さった査読者の方々に心よりお礼を申し上げる。また、本研究においてインフォーマントとして尽力してくださった Bolethe Olsen 女史、インフォーマントの紹介等で尽力してくださった**髙**橋美野梨氏（日本学術振興会特別研究員・北海道大学）のお二方にも心よりお礼を申し上げる。

**注**

＊ 本研究調査は、「平成 25 年度室蘭工業大学２１世紀科学研究費」による支援を受けて実施したものである（種目A; 研究題目: 「言語接触によるアクセント変化に関する基礎調査: グリーンランドにおけるデンマーク語を例に」; 研究代表者: 三村竜之）。

[1] インフォーマントとして尽力してくださった方は Bolethe Olsen 女史。グリーンランド大学付属図書館の司書を勤める。1963 年、Nuuk から 320km ほど北に位置するグリーンランド第二の都市 Sisimiut に生まれる。日本の小・中学校にほぼ相当する folkeskole にて約８年間デンマーク語を学んだという。この場をお借りして Olsen 女史に心よりお礼を申し上げる。

[2] 日本では「アンデルセン」の名で知られる Andersen であるが、デンマーク語での発音は敢えて仮名表記するならば「アナスン」である（デンマーク語では nd の綴りにおける d は黙字）。なお、推測の域を未だ脱し得ないが、「アンデルセン」の呼び名はおそらくドイツ語読みに由来するのではないかと思われる（アンデルセンの著作の最初の邦訳と考えられる『即興詩人』は、森鴎外の手によるドイツ語版からの邦訳である）。

[3] 一説では、800 年あるいは 900 年頃から 1400 年代半ばまでグリーンランド南部に居住していたとされる（ノルウェー）バイキングが入植した当時は、現在よりも気候が温暖であたたかく膝丈くらいまで草が茂っており、そこから Grønland と名づけられたという（スチュアート ヘンリ (2013: 14)； 他にも諸説有り）。

[4] 「グリーンランド自治法」の全文は https//www.retsinformation.dk にて閲覧が可能（参照日: 2014 年 1 月 17 日）。

[5] グリーンランド語の（桁の大きい）数詞がデンマーク語からの借入語であることは比較的よく知られているが（宮岡 1978）、その他にもグリーンランド語にはデンマーク語からの借入語が少なくなく、*bøffi*（cf. デンマーク語 *bøf*「ステーキ」）や *bussi*（cf. デンマーク語 *bus*「バス」）のように、接尾辞 *-i* を付加して借入している（Kolte 1999）。

[6] 私信（高橋美野梨氏: 2013 年 9 月 13 日）によれば、（筆者個人の印象では決して観光客の多い場所ではない）ヌークを訪れる観光客の圧倒的多数がドイツ人であるという。現に、筆者がヌークに滞在中にも、大型客船でヌークに寄港した多くのドイツ人観光客に遭遇した。

[7] 筆者がヌークに滞在中、唯一と言ってよいが、デンマーク語で話しかけたにもかかわらず頑に英語で返答された経験が（様々な言語を背景とする人々の集まる観光案内所は除き）唯一ある。宿泊先のホテル（とはいえ、日本の感覚ではむしろ民宿に近いかもしれないが）での出来事であるが、食堂で給仕をしているアジア系の風貌の青年は、筆者のみならず他の宿泊客にも、そして仕事仲間にも英語を使用していた。私信（高橋美野梨氏: 2013 年 9 月 12 日）によると、（理由は定かではないが）ヌーク在住のアジア系移民の大多数がタイ人であると言われており、どうやらその給仕もタイ系の移民だったようである。

[8] 残念ながらヌーク滞在中にラジオ放送を聴取する機会が得られなかったため、ここではテレビ放送にのみ言及する。

[9] 例えば、筆者がノルウェー語標準方言（Bokmål）の調査を行っていた時にも、個人の発音の癖なのか言語変化であるのか判断に苦しむ経験をしたことがある。当時インフォーマントを務めて下さった 20 代女性の方の [n] の発音が聴覚的には [m] に酷似していることに気付き、口元を観察してみると、舌尖と上唇が軽く触れる（linguolabial）調音を行っていることが分かった。この女性一名をインフォーマントとしていたため、この発音を個人的な癖なのかと当時は考えていたが、後に、比較的若い女性に見られる発音の傾向である（Uri 2005: 144; Husby et al. 2003）ことが分かった。

## 参考文献

Breinholdt Larsen, Finn (1992). "For meget af en god ting: dansk i Grønland." *Politica* 24-4, pp. 374-392.

Ferguson, Charles Albert (1959). "Diglossia." *Word* 15, pp. 325-340.

Grønnum, Nina (2005). *Fonetik og Fonologi: Almen og dansk.* 3. udgav. København: Akademisk Forlag.

Hagström, Björn（1984）. " Language contact in the Faroes." Eds., P. Sture Ureland and Iain Clarkson. *Scandinavian Language Contacts.* Cambridge: Cambridge University Press, pp. 171-189.

Husby, Olaf, Herdis Moldøen, Åshild Odeen og Inger Sandnes (2003). *Apex-ekshibisjonisme. Et nytt uttaetrekk i norsk?* Foredrag MONS 10.

Jakobsen, Birgitte (1998/99). "Sprog i kontakt. Er der opstået en ny dansk dialekt i Grønland?: En pilotundersøgelse" *Grønlandsk Kultur- og Samfundsforskning 98/99*, pp. 37-50.

Koch, Palle（1975）. " Grønland: en ø, et kontinent." Ed., P. Koch. *Grønland*. København: Gyldendal, pp. 9-10.

Kolte, Svend (1999). "Kalaallit Oqaasii: Det Grønlandske Sprog." Eds., Jørgen Lorentzen, Einar Lund Jensen, Hans Christian Gulløv. *Inuit, Kultur og Samfund: En Grundbog i Eskimologi.* Aarhus: Forlaget Systime, pp. 86-96.

日下稜（2004）.『高校生ひとり白夜のグリーンランドを行く』. 旭川: 北海道地図株式会社.

Langgård, Per（1992）. "Grønlandsksproget--tosproget--grønlandsksproget: Nogle tendenser i det dansk-grønlandske sprogmøde blandt Nuuks skolebørn. *Grønlandsk Kultur- og Samfundsforskning 92*, pp. 104-128.

三村竜之（2009）.「デンマーク語閉鎖音の再解釈: 具体音声と音韻解釈」.『日本言語学会第 139 回大会予稿集』, pp. 252-257.

三村竜之（2012）.「ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアクセント: アクセント抽出の理論と実践」.『明星大学研究紀要』【人文学部・日本文化学科】第 20 号, pp. 77-95.

Mimura, Tatsuyuki（2009）. *Issues in Danish Word-prosody: A synchronic description.* 未公刊博士学位請求論文（東京大学大学院人文社会系研究科, 2010 年 3 月受理）.

Møller, Aquigssiaq（1988）. " Language policy and language planning after the establishement of the Home Rule in Greenland. " Eds., J. Gimbel, E. Hansen, A. Holmen and J. N. Jørgensen. *Papers from the Fifth Nordic Conference on Bilingualism: The Royal Danish School of Educational Studies, Copenhagen, June 22nd-June 25th, 1987*. Clevedon/Philadelphia: Multilingual Matters, pp. 177-179.

宮岡伯人（1978）.『エスキモーの言語と文化』. 東京: 弘文堂.

Normann Jørgensen, Jens (2004/05). "Yo Wha Up Eskimo? Senmoderne sproglig adfærd hos unge i Nuuk." *Grønlandsk Kultur- og Samfundsforskning 2005-06,* pp. 129-151.

Olsen, Carl Christian（2005）. "Kalaallisut -- grønlandsk." *Nordens sprog -- med rødder og fødder.* København: Nordisk Råd, pp. 113--127.

Rischel, Jørgen (1974). *Topics in West Greenlandic Phonology: Regularities Underlying the Phonetic Appearance of Wordforms in Polysynthetic Language*. Copenhagen: Akademisk Forlag.

スチュアート ヘンリ（2013）.「グリーンランド今昔物語」.『極北の島グリーンランド 氷海のハンター、エスキモー』（北海道立北方民族博物館 第 28 回特別展図録）. 網走: 北海道立北方民族博物館, pp. 11-19.

Thomason, Sarah Grey, Terrence Kaufman (1988). *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics.* Berkeley/Los Angeles/Oxford: University of California Press.

Uri, Helene (2005). *Hva er språk.* Oslo: Universitetsforlaget.

Weinreich, Uriel (1953). *Languages in Contact: Findings and Problems.* The Hague: Mouton.

執筆者紹介
氏名: 三村竜之（みむら・たつゆき）
所属: 室蘭工業大学 大学院工学研究科 ひと文化系領域
Email: m76tatsu@gmail.com